広島県府中市　モノづくり 府中から全国へ

広島県府中市は、県東部備後地方の内陸部に位置する人口約3万4000人の地方都市。一見平凡な小都市だが、市内には上場企業4社が本社を構え、木工、繊維、機械、金属製品と厚い産業集積を誇る。昼間人口が夜間人口より多く、備後地方の雇用を支える産業都市でもある。かつて備後国の国府が置かれた古都の魅力を紹介する。

婚礼家具で一世風靡「府中家具」

婚礼タンスセット。団塊世代の結婚に合わせ一大ヒット商品となった

広島県府中市の特産品の一つが家具。「府中家具」は府中家具工業協同組合（広島県府中市）によって2007年3月に地域団体商標に登録された。現在、組合には12社が加盟している。

府中市は陸上交通と芦田川の舟運が交わる要衝で、中国山地の木材が切り出されて運ばれてくる集積地だった。一帯は「備後桐」と呼ばれたキリの産地でもあり、府中家具以外にも福山市の「福山琴」や福山市松永のげたといった木工業が起こる基盤となった。

江戸時代中期の宝永年間（1704―1711）に大阪から衣装だんすの製法が伝わり、府中市鵜飼地区を中心に木工業が定着。長持（ながもち）などともあわせた指し物類を周辺地域に供給する拠点となった。

全国に名を知られる家具産地として発展したのは戦後のこと。それまで別の業者が製造していた和ダンス、洋服ダンス、整理ダンスの三つのタンスを、府中の家具メーカー数社が相談し、同じ木材から取った薄板（ツキ板）を用いてデザインを統一、婚礼3点セットとして売り出した。

初披露は56年（昭31）に広島市の百貨店、福屋で開かれた「広島県物産見本市」。これが、72年に年間約110万組とピークを迎えた団塊世代の結婚ラッシュに合わせて爆発的なヒット商品となった。全国からバイヤーが府中市に押し寄せ「忙しくて納期が間に合わないので、しかたなく注文を断っていた」（府中家具工業協同組合ホームページより）メーカーもあったという。

組合は68年に府中家具共同センター、76年に隣接地に府中家具協同会館を建設。組合員が共同で、家具を展示したり在庫したりできる体制を整えた。府中市の家具産業は急成長した。55年には組合加盟者数43社、年間実質出荷額9億円だったところ75年には65社、589億円まで伸びている。

府中家具、新しい世代へ

一世を風靡（ふうび）した府中の婚礼家具も、その後の住宅事情やライフスタイルの変化、婚礼件数の減少を受けて市場が縮小。メーカー各社は淘汰（とうた）と変化を余儀なくされていく。

タンスなどの「箱物」家具からテーブルや椅子などの「脚物」家具へのシフトが課題になる中、「新しい家具を作っても、当初は『タンス屋だろ？』といわれて見向きもされなかった。そこでタンスから離れられなかった会社がダメになっていった」と、若葉家具（広島県府中市）の井上隆雄社長（府中家具工業協同組合理事）は話す。

今や、12社の組合加盟メーカーは、オーダー品以外で婚礼タンスをそろえる会社はほぼなくなった。そして生き残ってきた各社は、それぞれ独自の生き残り策と強さを持っている。

デザイナーと組んだデザイン路線、高級路線へのシフトや、海外市場やネット販売の強化。さらにはホテルやマンションなどの家具を一括で請け負う「コントラクト」事業などだ。

家具産地としての府中を再び打ち出そうとする動きもある。25年5月、組合加盟5社と隣接する広島県福山市の2社、計7社の家具メーカーで「備後オープンファクトリー」を3日間開催した。全国から集まった家具販売店や工務店などの担当者に各社の工場やショールームを開放し、ワークショップも開いた。

北は秋田から南は鹿児島まで100社程度が参加。新規取引先の開拓例もあり、参加各社には手応えがあったようだ。「ほかの家具会社に工場を見せるなんて、以前はタブーだった。みなさんいい反応だったようで、来年もやることになった」と、音頭を取った井上社長は話す。

7月には、伝統工芸（広島県府中市）が組合に新規加入した。88年設立と若い会社で、額縁メーカーからスタートしてオリジナル家具に進出した。新規加入は9年ぶりだが、実質的な新規参入は、かなり以前までさかのぼらないとなかった模様だ。

井上社長は話す。「タンスは少なくなっても『府中家具』のブランドは生きている。家具産地といえば旭川、飛騨、大川が挙がるが、そこにもう一度、府中も入れるようになりたい」。「府中家具」が再び栄光の日を取り戻す時は来るか。

若葉家具の井上隆雄社長（府中家具工業協同組合理事）。23年にリニューアルした本社ショールームで

若葉家具が商品化した小屋「わかばこ」。「大きな家具」と「小さな家」の中間的存在として、空間全体をプロデュースするという意思を込めた

有力企業の製品・技術（順不同）

北川精機

重量物収納・搬送 カスタマイズ

レーザー加工機連動の「システムストッカー」

北川精機は主力の熱成形プレス装置のほか、生産現場の自動化、合理化で生産性向上に貢献するFA（ファクトリーオートメーション）関連設備も数多く手がける。

鋼材などの材料や製品を効率よく収納・管理できる「ソリッドストッカー」は、設置場所や収納物のサイズ、重量に合わせて高さや幅、段数、耐荷重などを自在にカスタマイズ可能。1983年の発売以来、2000台以上を売り上げるロングセラー商品となっている。

他社製品に比べ、重量物への対応を得意としており、4月に東京ビッグサイト（東京都江東区）で開催された展示会では、業界トップの1段あたり最大8トンまで収納可能な「超重量物収納ストッカー」を紹介した。

近年はレーザー加工機と連動させて材料交換を自動で行い、加工機の長時間自動運転を可能とする「システムストッカー」の引き合いが増加している。省人化のための自動化ニーズに加え、加工する板厚が年々、増加する傾向にあることから、重量物の収納・搬送を得意とする北川精機の技術が注目されている。

北川鉄工所

人・ロボ協業 次世代工場目指す

低把握力チャック「VSPシリーズ」歪みやすいワークを低把握力でつかめる防塵・防水チャック

北川鉄工所は、工作機器、産業機械、金属素形材の3分野が事業の柱。

工作機器事業は旋盤に装着するチャックが国内トップシェア。このほか、NC（数値制御）円テーブルやパワーバイス、ロボットハンドなどを手がける。1月には新工場「Factory I」が完成した。「自動化を極め、品質を極める」をコンセプトに、人とロボットが協業する最大限に効率化した次世代工場を目指す。

産業機械事業はビル建設用タワークレーン、環境・コンクリートなど各種プラントや自走式立体駐車場を扱う。風力発電用風車建設クレーンなどの新商品の開発やスーパーロングスパンタイプの立体駐車場の拡販に力を注ぐ。

金属素形材事業は鋳物素材の鋳鉄を核とし、自動車や建設・農業機械の部品を製造。生産拠点は国内のみならず海外拠点としてメキシコにも展開する。

さらに新規事業として、ウオーターカッターなどの特殊工作機械の開発を手がける。既存事業との連携により、新たなビジネス領域への展開を目指す。

リョービ

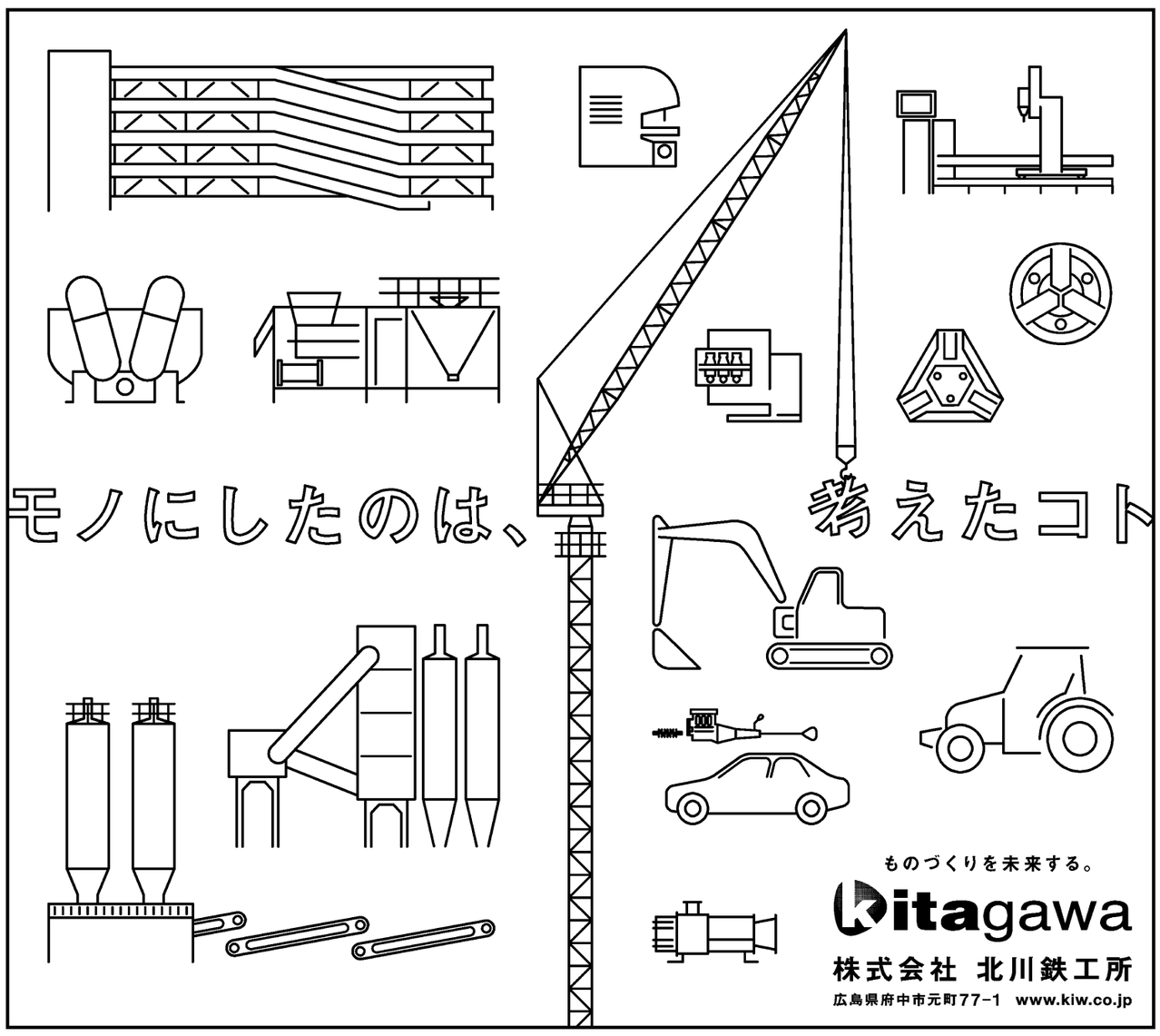
超大型ダイカストマシン導入

型締め力6500トンの超大型ダイカストマシン

リョービの主力、ダイカスト事業は自動車メーカーに高品質な製品を供給。製品の試作から金型の設計・製作、鋳造、加工、組み立てに至る独自の一貫体制を確立しグローバルに事業展開している。

電動化が進む自動車業界では、軽量化やコスト削減が課題となる中で大型部品を一体成形する「ギガキャスト」に注目が集まる。3月、菊川工場（静岡県菊川市）に大型部品試作工場を新設。ダイカスト専業メーカーとして国内初となる型締め力6500トンの超大型ダイカストマシンを導入し、自動車メーカー向けに試作サービスの提供を開始した。

一方、建築用品事業では、ドアの安全な開閉をサポートするドアクローザーに高品質な製品を供給。製品の試作から金型の設計・製作、鋳造、加工、組み立てに至る独自の一貫体制を確立しグローバルに事業展開している。

電動化が進む自動車業界では、軽量化やコスト削減が課題となる中で大型部品を一体成形する「ギガキャスト」に注目が集まる。3月、菊川工場（静岡県菊川市）に大型部品試作工場を新設。ダイカスト専業メーカーとして国内初となる型締め力6500トンの超大型ダイカストマシンを導入し、自動車メーカー向けに試作サービスの提供を開始した。

一方、建築用品事業では、ドアの安全な開閉をサポートするドアクローザーを提供する。電動式ドア開閉装置「RUCAD（ラクアド）」は外部機器と連携し、非接触で開閉できる機能でバリアフリー化に貢献。印刷機器事業は自動化技術で印刷工場のスマート化を支援する。リョービはモノづくりの力でさまざまなものを軽くする「軽量化貢献カンパニー」として、カーボンニュートラルや循環型社会の実現に貢献していく。